

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1184 号	氏 名	杉 浦 亜 弓
論文審査担当者	主 査 竹 下 敏 一 副 査 山 田 充 彦 ・ 伊 藤 研 一		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>C型肝炎は感染から10年の経過で慢性肝炎、20年で肝硬変へと進展し、30年で肝癌を合併するという慢性的な経過を経ていく疾患である。治療としてインターフェロン(IFN)が用いられていたが、副作用が多くウイルス学的著効(sustained virological response : SVR)率は50%程度と十分ではなかった。2014年に登場した直接作用型抗ウイルス剤(Direct Acting Antivirals : DAAs)治療では95%以上のSVR率が得られるようになった。実際に長野県におけるDAAs治療成績でも、SVR率は96%と高い治療効果を得ている。しかしながら少数例ではあるがDAAs failure症例(治療不成功例)が存在する。肝細胞癌の併存がDAAs failureのリスク因子であることは報告されているが、肝細胞癌既往例とDAAs治療効果に関しては未だ検討されていない。2015年4月～2017年10月にDAAs治療を導入した長野県内18施設におけるC型慢性肝炎症例960名の内、データ欠損症例である122名を除外した838名を対象とし、肝細胞癌の既往有群と既往無群の2群に分け、後方視的に患者背景と臨床検査値の比較検討を行った。</p> <p>その結果、「杉浦亜弓」は以下の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 肝細胞癌既往有例の臨床的特徴としては高齢で男性が多かった。2. 肝細胞癌既往有例の臨床検査値では血小板低下や肝線維化マーカーの上昇を認め、肝線維化進展が示唆された。3. 肝細胞癌既往有群は既往無群と比して有意にDAAs failure率が高かった。4. DAAs failureに関連する因子の多変量解析を行うと肝細胞癌の既往のみが抽出され、肝細胞癌の既往がDAAs failureに関連する独立した因子である可能性が考えられた。 <p>多数例の検討により、C型慢性肝炎の規治療薬であるDAAs治療に対する治療不成功のリスク因子として、肝細胞癌の既往が挙げられることの報告である。肝細胞癌既往有例では、病態が進行し肝線維化進展が示唆された。また肝細胞癌既往有例ではDAAs failure率が高く、さらに肝細胞癌再発率が高いことから、DAAs治療は病態進展前、特に肝細胞癌を発症する前の出来るだけ早期に治療介入が望ましいと考えられた。</p> <p>したがって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			